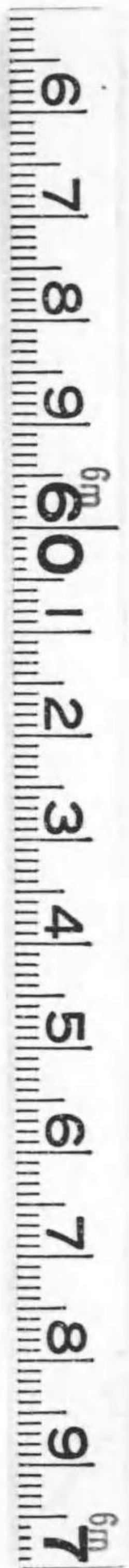


日本電報世年略史

特 259

377



始



特259

377

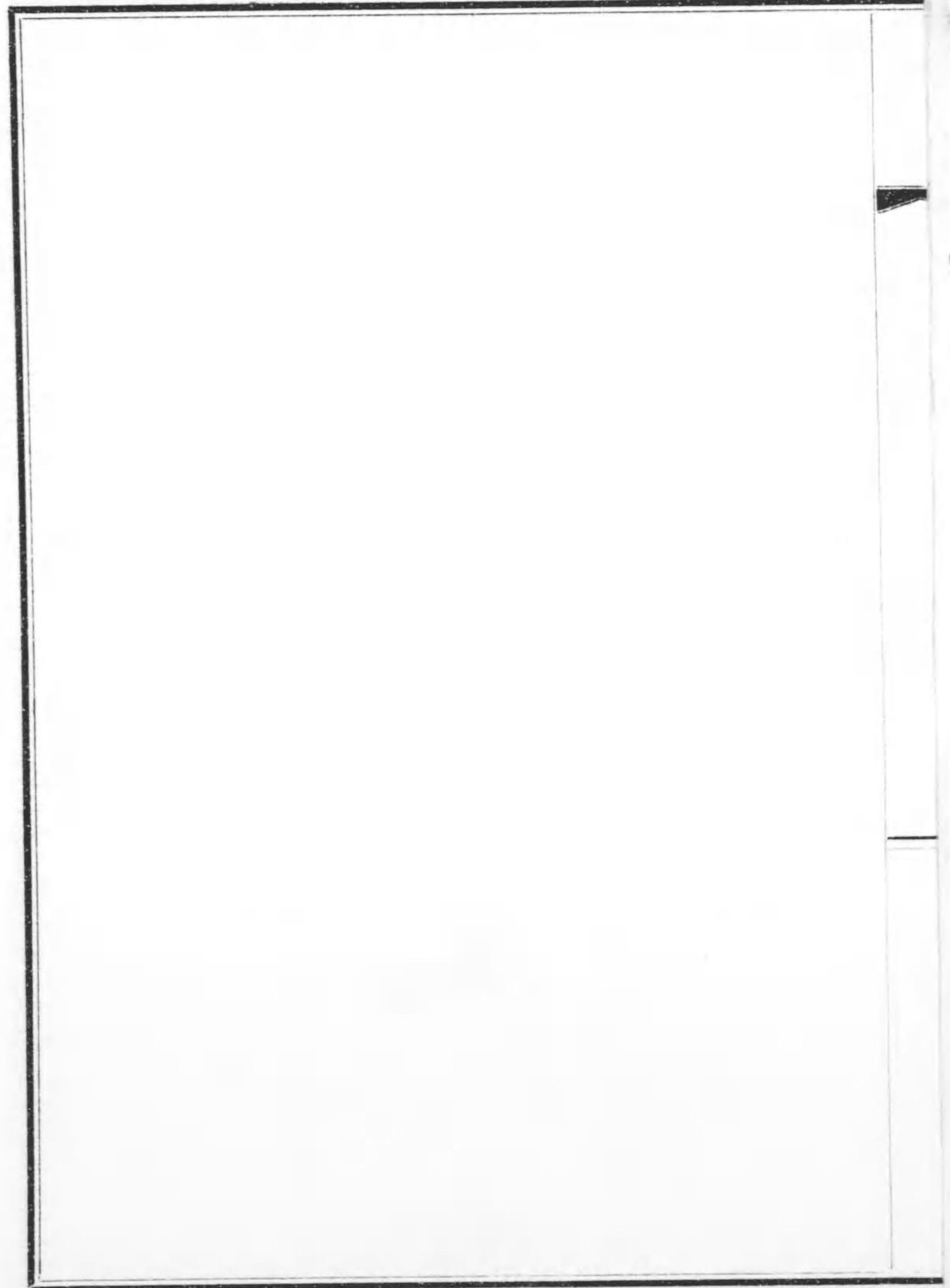


日本電報世年略史



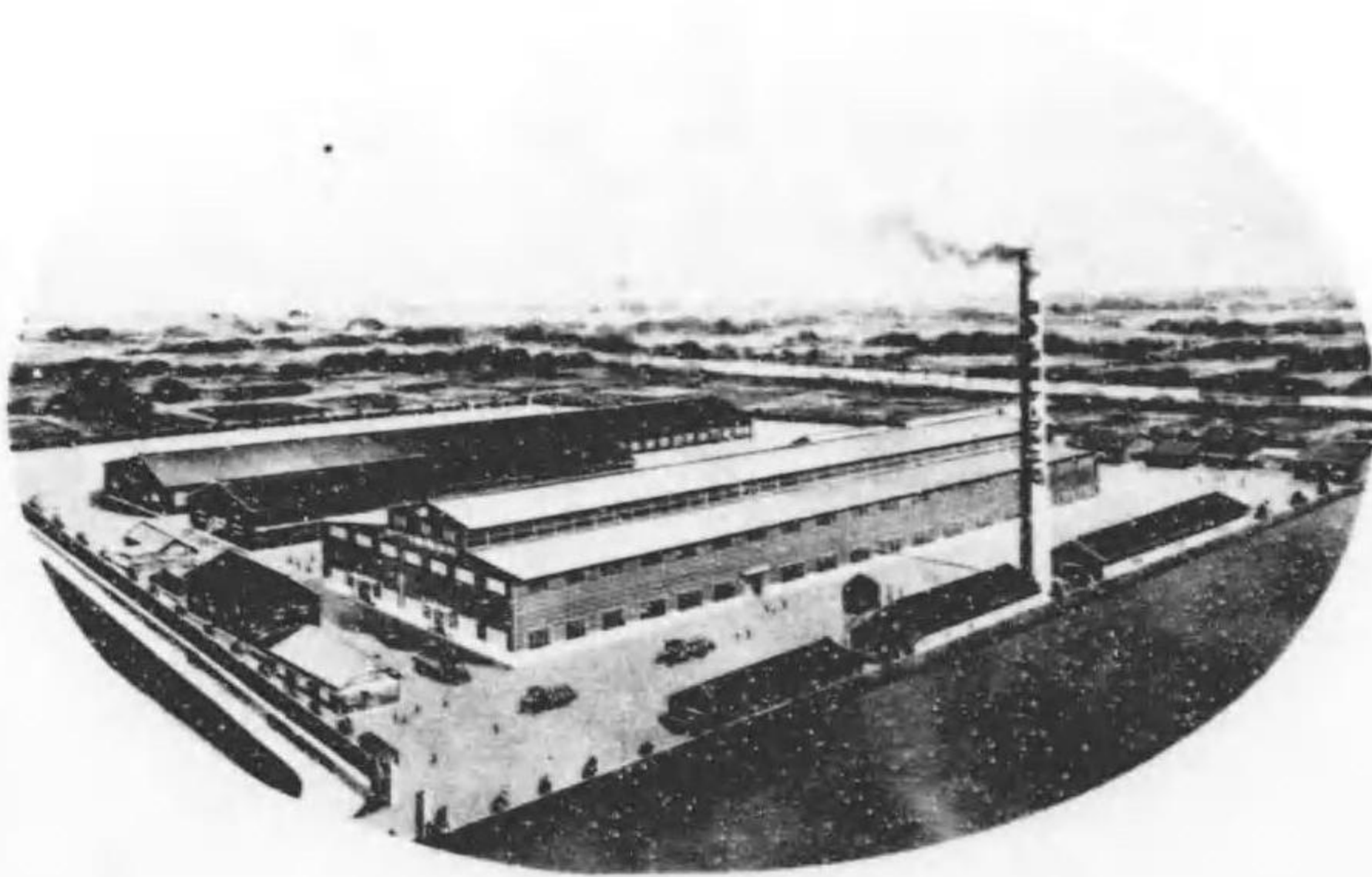


氏郎太刀山崎 長社





場工島向及社本



場エルプーケ紙崎川



序

明治四十年二月小森徳八氏ノ事業ヲ繼承
シ日本電線株式會社成ル爾來春風秋雨參拾
年今ヤ事業益々擴大シ社礎愈々鞏固ニ鵬翼
ヲ斯界ニ張ルニ至レルハ洵ニ欣快ニ堪ヘザ
ル所ナリ然レドモ創業後十一二年間ノ事蹟
ヲ回顧スレバ社運蹇難或ハ責任者ノ敗退ト

ナリ或ハ減資ノ慘狀ニ陥リ或ハ大株主ノ移
動トナリ内外ノ紛紜常ニ絶ヘズ殊ニ歐洲大
戰當時國運隆昌財界殷賑ヲ極メ同業者各順
風孕帆熙々タルノ時ニ際シ獨リ我社ハ業蹟
頽墮萎靡難問山積シ殆ンド跋前疐後ノ窮境
ニ瀕セントセリ時適々古河男爵等ノ推挽ニ
依リ不肖選バレテ經營ノ任ニ當レリ乃チ寄
託效無ク先輩推舉ノ明ヲ傷ケンコトヲ恐レ

夙夜殫慮シ更ニ年少氣銳ノ俊雋ヲ拔擢シテ
各部ノ要所ニ配シ一致協力以テ社運振興ノ
事ニ從フ爾來財界ノ變遷ニ伴ヒ措置當ヲ失
シ一隆一替時ニ顧籍ニ値スル者無キニアラ
ザリシト雖モ大正九年ノ大恐慌ニ際シテハ
川崎家ノ知遇後援ヲ得テ難關ヲ突破シ大震
火災ニ當リテハ從業者ノ一致協力ノ苦心ニ
賴リ聊カ帝都復興ニ資スルヲ得猶且ツ最近

世界未曾有ノ不況ニ當リテハ住友合資ノ助
 カヲ得遂ニ能ク今日ノ隆運ニ會スルヲ得タ
 リ是レ偏ニ先輩知己不斷ノ扶掖ト一般顧客
 支援ノ致ス所ナリト雖抑モ亦職員職工諸子
 ノ戮力馳驅ノ效ニ頼ラズンバアラズ今茲ニ
 創業三十周年ヲ迎フルニ際シ沿革略誌ノ刊
 行ニ及ビ聊カ本社ノ由來ト所感トヲ述べ先
 輩諸賢並ニ大方諸彦ニ感謝ノ微衷ヲ表シ併

セテ卷首ニ冠シテ序文ニ代ヘント云爾

昭和十二年五月

日本電線株式會社

社長 崎山 刀太郎

目 録

創業時代……………一丁

不振時代……………四

飛躍時代……………七

戦後の経営……………七

大震災前後……………十

質的の発展……………十三

ケーブル時代……………十五

ケーブル企業.....	十五
倍額増資まで.....	七
附 表	一
賣上高比較表.....	一
原料銅使用高比較表.....	二

日本電線卅年略史

創業時代

明治四十年二月廿八日、京橋區日吉町の帝國鐵道協會に於て創立總會を開き、株式會社としての吾「日本電線」は茲に始めて孤々の聲を擧げたのであるが既存の小森電線製造所を買收して設立したるものであるから、事業自體として

の經歷は、更に古き時代に遡る事が出来る。

小森電線製造所創立者故小森徳八氏は尾張の人、幼にして上京、組紐製造業より電線製造に轉じたるもので、氏が市外大崎に於ける工場より府下寺島村即ち吾社現在所の一部に移轉し來れるは、明治卅五年であつて工場建坪三百餘坪、従業員約五十名であつた。之を現今の標準より見れば、誠に微々言ふに足らざるものであるが、當時にありては墨堤以東、小森工場に比すべ

きものとしては、鐘ヶ淵紡績工場、高見澤メリヤス、山崎染色工場等に過ぎなかつた。附近は住家點々、主に池沼、田圃であつた。東京電燈を最大の顧客とし、白ペンキ編組線、バラフィン線、コード類を納入して居つた。

日露役後、電燈、電力の需要増加に伴ひ、事業擴張の必要を感じ、前記の如く吾社の創立となつた。資本金壹百萬圓、第一回拂込金貳拾五萬圓、株主三百四十六名、初め本社を京橋區三十間堀に

置き、幾何もなく同區彌左衛門町三番地所在の煉瓦作家屋を購入、此處に移轉した。工場敷地は明治四十年四月現在に於て千五百五十坪、建坪七百八十九坪、初代重役陣は

專務取締役	一柳友次郎
取締役	稻茂登三郎
同	小森徳八
同	青木大三郎
同	宮本榮太郎

監査役	田川柳助
同	村井眞雄

であつた。當時の業界並に需要方面の趨勢に就ては、明治卅九年十一月に發表された吾社の設立趣意書に、興味多き記述があるから、左に全文を掲録する。

歐米ノ科學ヲ取テ我工業ニ消化シテヨリ總テ新進ノ製作物ハ寧口彼ヲ凌駕スルノ今日

而モ當代ノ産業ハ専ラ電氣ノ應用ニアルニ拘ハラズ獨リ其骨子タル電線製造業ノ振ハザルハ蓋シ我工業界ノ一大缺點也。矧ンヤ戰後ノ發展ハ滿韓ヲ奄有シテ清國ニ延ビ内外共ニ多大ノ需用アルニ於テオヤ。此時縱ヒ二三ノ小工場アリト雖モ到底年々増加スル電氣工業ノ盛ニ伴ハズ現ニ昨三十八年上半期ヨリ本年下半期ニ至ル一年間新設電氣業ハ全國ヲ通ジテ二十二會社ノ多キニ及ビ由來

計畫中ノモノ亦數種アリテ日ニ電線ノ要急ニ迫ラレツ、アルノ時依然トシテ之ヲ外國品ニ仰グハ愚ノ極也。於是有志胥謀リ斯業ノ爲ニ一ノ新會社ヲ起シ一面輸入ヲ防グト同時ニ一面内外ノ需用ニ應ジ敢テ産業發展ノ途ヲ啓カント欲ス。其公私相益スルニ至テハ今更些ノ贅說ヲ要セザル可ク因テ裁ニ梗概ヲ約言スルコト如此。

不振時代

新興の吾社が擴張工事は順調に進み、四十一年末には増設計畫建家全部の完成を告げ、獨逸クルツプ製を主としたる舶載の諸機械類も之に伴つて据付けを了した。而して此間に於ける營業成績も稍々見る可きものがあつたが、利益を計上し得たるは僅に二年、日露戦後の財界不況による需要の減退、同業競争の激化に禍され

四十二年上期には損失を發表し、同年下期専務一柳氏外重役數氏の引退となり、之等數氏の所有株を譲受けたる古河鑛業會社を代表し四十二年、太神壽吉氏入りて専務取締役に就任した。下期央荒川の大洪水あり、吾社附近一帶泥海と化し工場内浸水五六尺に達し、休業半ヶ月に及んだ。

此前後數期は、吾社卅年の經歷中、萎靡最も振はざりし時代で、無配五期に涉り四十四年下期

には、公稱資本金百萬圓内拂込五拾八萬八千圓を、拂込済四拾萬圓に減資するの止むなきに至つたが、大正二年上期、再び資本金を百萬圓に増資し、接續地を買収して、工場を増設を行つた。即ち創立當時千五十餘坪の所有敷地を二千五百餘坪とし、建坪は七百餘坪より千五百餘坪に増加した。

大正三年上期、太神氏に代りて大槻音松氏専務取締役となり、吾社は曠古の歐洲大戰時代を

迎へた。戦亂の擴大、繼續が、如何に我國財界を利したるかは絮説を要しない。固より業界亦殷賑を極め、同業各社は相次ぎて事業を擴張した。然るに當時に於ける吾社の經營方針は、頗る消極的であつて、古河鑛業會社の下請を事業の根幹とし、製造品種極めて僅少、顧客は電氣器具商、問屋方面を主とし、直接需要家としては二三民間會社、及び陸海軍、逓信省に其需品の一二を納入するに過ぎざる状態であつたから、空前の大戦

景氣も、少しも吾社に幸ひするところなく、局面打開のために試みたる、印度、南洋、支那方面への海外輸出も、大戦の終熄期に入りては、却て吾社に二重の災厄を齎すに過ぎなかつた。踉蹌として振はざる業績の數期が續いた。物價狂騰すれども給與之に伴はず、従業員に動搖の色漸く濃く、經營當局に對する不満の聲期せずして大株主間に起る。大正七年上期、専務大槻氏辭す。

飛躍時代

吾社卅年の經歷を概観するに、大正七年下期以前の十年と、夫れ以後の廿年との間に、截然たる差異を感ずる。前十年は吾社消極不振の時代所謂町工場の域を何程も脱せぬ時代であり、後の廿年は吾社積極飛躍の時代即ち斯業一流會社の盛容を整へたる時代である。而して此の廿年を、一貫して主宰せるものは現社長崎山刀太

郎氏である。氏は東京府士族、早稻田大學に學び明治卅八年政治科を卒業古河鑛業會社に入る。大正七年五月、局面展開の使命を帯び、前述の如き紛然たる吾社に専務取締役として就任した。

戦後の經營

歐洲大戰の終熄が、輸出に手を染めたる吾社に二重の災厄を齎したりとは、輸出の杜絶による販路の激減と、積送品の返還とを言ふ。戦亂の

終熄と共に歐洲各國は自國産業を平時の常態に返へさんが爲め、あらゆる手段を講じた。彼等の植民地市場に氾濫し居りたる日本商品は、苛烈なる輸入防遏手段により完全に締め出しを喰はされた。輸送航海中のものは其儘積み戻され、現地貯藏品の未賣却分までも引取りを餘儀なくされた。吾社輸出品にして此厄に遭ひたるは、殊に濠洲方面に多く、或る一線種のみにても三千哩(四百八十萬米)を算したる程であつた。

死蔵と化し去りたる老成なる輸出向電線の處分と、失はれたる販路の再建とは、當時に於ける吾社死活の岐路であつて、新任の崎山専務が最初に當面したる難局であつた。

大正八年、社員を派して積戻品に纏はる諸紛争を解決し、死蔵品長期國外處分の方策を定め失はれたる販路は、直接需要家たる電燈、電力諸會社、官公署に求めて從來の間接販賣は一切之を避け、工場技術方面に於ては頻りに新人を起

用して清新の氣を注入し面目頓に一新した。更生したる吾社の營業成績は茲に一變して特別配當を行ふに至つた。

斯くして、大正九年の世界的恐慌、其後の打ち續く財界沈衰時代に處しても、吾社は大に積極方策を採り、九年末、新に製綱工場を興し、十年下期には、大阪、仙臺兩市に出張所を開設し、第三編組工場を増設した。従て従業員數に於ても、崎山専務就任當時に比し概ね八〇パーセント増加

を前後し、賣上高亦一〇〇パーセント増を示し依然特別配當を繼續した。十一年下期の營業報告書は、不況沈衰の環境及び吾社の之に處したるの跡を左の如く記してゐる。

財界依然沈衰ノ極ヲ持續シ金融益不圓滑トナレル結果需要逐次減退セシタメ資力薄弱ナル業者ハ間歇的投賣ヲナシ市價生産費ヲ下廻ルノ窮狀ニ陥リ同業各社ノ損害尠少ニ

非ズ當社ト同種ノ加工ヲ營メルモノ概ネ閉業同様ナル悲境ニ沈淪ス此間當社ハ數年來増設改善ヲ施セル機械設備ヲ利用シ能率ノ増進ヲ圖リ比較的有利ナル品種ノ増産ヲ企圖シ生産費ヲ低減シ極度ノ競争ニ應ジタリ

大震災前後

引續く財界の不況は、大正十二年に至り一部地方銀行の取付騒とまで深化したが、一方米國

財界の殷賑其他の好影響あり、電線界漸く活況を呈し來れるため、既に十一年秋、相場高騰を先見して買付けたる巨量の原料銅線は、此處に至りて其果を收め、吾社の利益額は、販賣高と共に創業以來のレコードを示し、六月の定時株主總會に於て前例なき一割五歩配當及び資本金貳百萬圓増資の議が可決された。而して未だ其第一回の拂込をも徴せずして突如關東大震災に遭遇した。

焦土と化した帝都と京濱方面に於て、火災の厄を免れたる電線製造業者は、吾社を以て最大とし他は言ふに足らざる小工場であつたから、人心恟々たる帝都を、暗黒から救ふ電燈、電力、通信の諸線は、大部分吾社に之を求むるの他はなかつた。警視廳よりの通信用電線徵發を先驅とし諸官廳、有力會社よりの供給命令は一時に殺到した。東京電燈株式會社は吾社一社の爲めに應急的送電を急ぎ、崎山專務は躬ら日光精銅

所に走りて銅線配給の非常方法を交渉し、東武鐵道は之を輸送するに特別貨車を運轉した。九月六日、川崎銀行より非常時後援の了解を得、五日早くも操業を開始したが、銅線こそは意の儘に供給されたれ、他の諸材料の蒐集には言語に絶する努力を必要とした。従業員は草鞋、破服眞に晝夜兼行、帝都復興の爲めに勞苦した。吾社の此奉公的活動なかりせば、帝都の暗黒は尙數十日繼續したる事と思ふ。十二年下期營業報告

書の次の記事は、如上吾社貢獻の事實を、最も雄辯に語つてゐる。

九月一日關東大震災ノ襲來ニ會シ東洋唯一ノ帝都モ忽チ燒土廢墟ト化シ流言飛語隨所ニ起リ人心恟々或ハ主義者ノ盲動トナリ或ハ鮮人ノ暴動ト化シ或ハ不逞漢ノ横行トナル不幸ニシテ本社附近ノ如キモ亦其範疇ヲ脱スル能ハズシテ十數日間時ニ夜陰銃聲ヲ

聞クニ至リ物情騒然社員工員數十名ノ義勇隊ヲ組織シ日夜工場ノ警備ヲ爲シ辛フジテ其任ヲ全フスルヲ得タリ、此間ニアリテ吾人ハ徐ロニ形勢ノ推移ヲ察シ六日漸ク銀行ノ了解ヲ得ルト共ニ忽チ各所ヲ奔走シテ主要原料ノ蒐集ニ努メ速ニ帝都復興ニ寄與スルノ策ヲ講ジ晝夜兼行工場ノ應急修理ヲ爲シ疲勞困憊セル従業員ヲ督勵シ九月十五日ヨリ再ビ操業ヲ開始シ惹テ強行晝夜作業ニ移

リ極力製造力ヲ擴大シ比較的速カニ帝都ヲシテ暗黒裡ヨリ脱セシムルニ少カラザル貢獻ヲ爲スヲ得タリ。

質的の發展

大正七年より大震災前までを、量的飛躍の時代とすれば、災後の數年間は質的發展の時代と言ふを得る。即ち従前所謂普通線、コード類の他は一二種の通信ゴム線を製造するに過ぎざり

しものが此期間に於ては各種高級線類の製造に成功し、紙ケーブル類を除きては、あらゆる品種を網羅するに至つた。大正十五年キャブタイヤゴム線を作り秩父丸所要の外國品を驅逐したるが如き、大正十五年三月被鉛工場を増設、同十月局内ケーブル工場を新設したるが如き、其一斑であるが、試に之等新製品が權威ある官廳に指名せられたる一二を例示すれば次の如くである。

陸軍關係

軍用線各種 大正十年

海軍關係

ゴム絶縁被鉛電線 昭和四年

ゴム絶縁被鉛装鎧電線 同

高絶縁電線 同

遞信省關係

各種局内ケーブル 大正十四年

重信鉛被局内ケーブル 昭和四年

各種鉛被ゴム線

同

鐵道省關係

通信用ゴム線

大正十年

高壓用ゴム線

同

以上の質的發展により、吾社は、復興景氣消滅後の所謂原料高、製品安の數年間——未曾有の金融恐慌を惹起したる昭和二年を含む數年を一割配當維持を以て順調に經過した。

ケーブル時代

ケーブル企業

現代に於ける絶縁電線の最高峯をなすものが紙絶縁ケーブルなる事は、固より喁々を要せぬ。此部門を缺きて完全なる電線メーカーと言ふ能はざる事も多言を俟たない。質的向上發展に腐心せる崎山専務が、率先紙ケーブル企業の重要性を説き、吾社が之に乗出し來るは自然の

數であつて既に大正十三四年の交には研究調査略々完了し、爾後向島工場に於て試作を繼續、一部を市販した。

昭和三年六月、定款改正、専務取締役を廢し社長を置く、崎山社長が下期の營業報告書に左の如く記したるは、川崎紙ケーブル工場新設の意圖を表明せるものであつた。

顧レバ大正七年財界殷賑ノ隆運ニ際シ、當社

社運獨リ振ハズ余選マレテ經營ノ難局ニ當ル、爾來十有一年、此ノ間世界的不景氣ノ襲來大震災ノ厄災アリ、加フルニ躬ラ不時ノ大患ニ苦シム事兩三年、今秋ニ至ルマデ健康意ノ如カラズ、固ヨリ日夜神肝ヲ碎キ營々孜々社運ノ振興ニ努メ僅ニ大過ナキヲ得タリト雖モ、所謂東奔西走席暖カナラザル底ノ活躍ハ體力之ニ堪ヘズ諸事不如意ノ憾アリシガ、近時漸ク健康意氣舊ニ復セルヲ以テ再ビ株主

諸賢、關係各位ノ鞭撻後援ニ頼リ更ニ大ニ社運ノ積極的發展ヲ企圖セントス。

四年九月、川崎市に地一萬坪をトシ、愈々紙ケ
ーブル工場の新設に着手、五年五月作業を開始
し、九月には早くも日本海電氣株式會社納の一
一、〇〇〇ボルト用特別高壓電纜を完成した。時
の遞信大臣小泉又次郎閣下が本工場を視察さ
れたるは五月廿日であつた。同じく九月、三菱商

事株式會社と代理契約を結び九州、朝鮮、北海道、
滿洲其他海外に於ける吾社製品の販賣を委托
した。大倉商事株式會社、株式會社進和商會の二
代理店とを併せ、遠隔の地に於ける吾社の販賣
網は茲に完備した。

倍額増資まで

多端なりし吾社の昭和四、五年は、一般財界に
も頗る多事なる年であつて、不況深刻を極め、社

會不安漸く増大した。而して吾社の劃期的事業たる紙ケーブル未だ其威力を發揮するに至らず、六年上期には、米國の部分的恐慌、支那の動亂等が起り來つた。業界は原價無視の亂賣戰場と化し、同業傷つかざるは絶無であつた。下期に至るも財界好轉の色なく、加ふるに滿洲事變の勃發による對支貿易の激減は、事業界を半ば恐慌状態に導き、終に吾社も、上下二期無配當の營業成績を發表するの止むなきに至つた。顧るに吾

社は、明治四十四年上期以前の無配期を最後とし、後ち不振ながらも十四期、崎山社長時代の廿五期併せて卅九期の長期間、無配を知らざるものであつた。而も今や斯くの如し、財界の窘窮、業界の混迷推知するに足る。

然し昭和七年初頭の政變後に實施されたる金輸出再禁止は、我國の經濟界を瀕死の状態より回生せしめた。米日爲替は奔落し、物價は一齊に昂騰して事業界は俄然生色を帯び來り、吾社

の營業成績は忽ち舊に復した。爾後財界の活況と共に社運稀れに見る好調裡に推移し

昭和七年 本社々屋増築

八年 試験場増築

九年 原料倉庫増築

十年 研究室増築

十一年 エナメル工場移轉増築

十二年 メツキ工場移轉増築

十二年 紙ケーブル工場増築

を行ひ、外觀を一新すると共に内容の充實に意を注ぎ機械設備の改善、新設枚舉に違なく、技術方面に於ても搬送式局内ケーブルの指名を遞信省より受け、耐焼性NSゴム線の製作に成功した。工場敷地は大正七年に比し約十倍、貳萬坪となり、常時保有銅は千餘噸に上つてゐる。近時、世人吾社を評して「新設せんには壹千萬金を投ずるも能はず」となす、其由無しとせぬ。

新規事業たる紙ケーブルは、此間著しき進歩

を遂げ、通信用乾紙ケーブルに於ては、昭和五年二百對架空ケーブルを、六年千二百對地下ケーブル、二十八對重信ケーブル、七年四十二對重信ケーブルを、何れも遞信省電氣試験所に提出して嚴密なる檢定に合格、動力用油紙ケーブルに於ては二二、〇〇〇ボルト用及び三三、〇〇〇ボルト用超特別高壓ケーブルを、昭和九年以來夫々陸軍造兵廠大阪工廠、廣島電氣株式會社、宇治川電氣株式會社、臺灣電力株式會社、日本鋼管株

式會社、日本製鐵株式會社、東京電燈株式會社等に納入して好評を博し、先進ケーブルメーカーに伍して遜色なきに至つた。

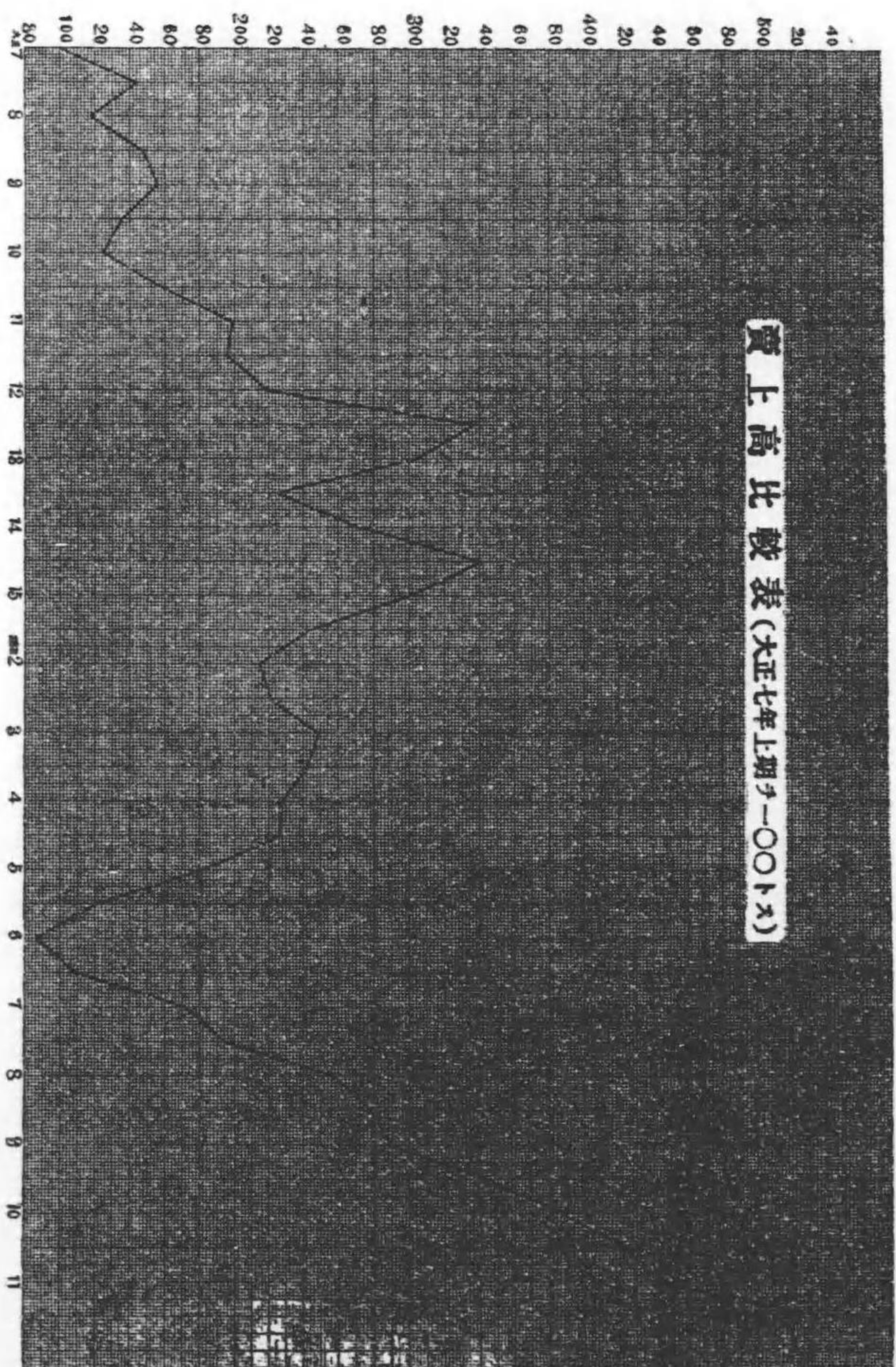
昭和十二年、滿洲電線株式會社、日本電信、電話工事株式會社の設立に参加。四月廿日臨時株主總會を開き、資本金貳百萬圓を倍額金四百萬圓に増資の議を可決す。

現重役左の如し。

社 長 崎山刀太郎

常務取締役	西田正一
取締役	大橋福松
同	長妻信篤
監査役	渡邊與三郎

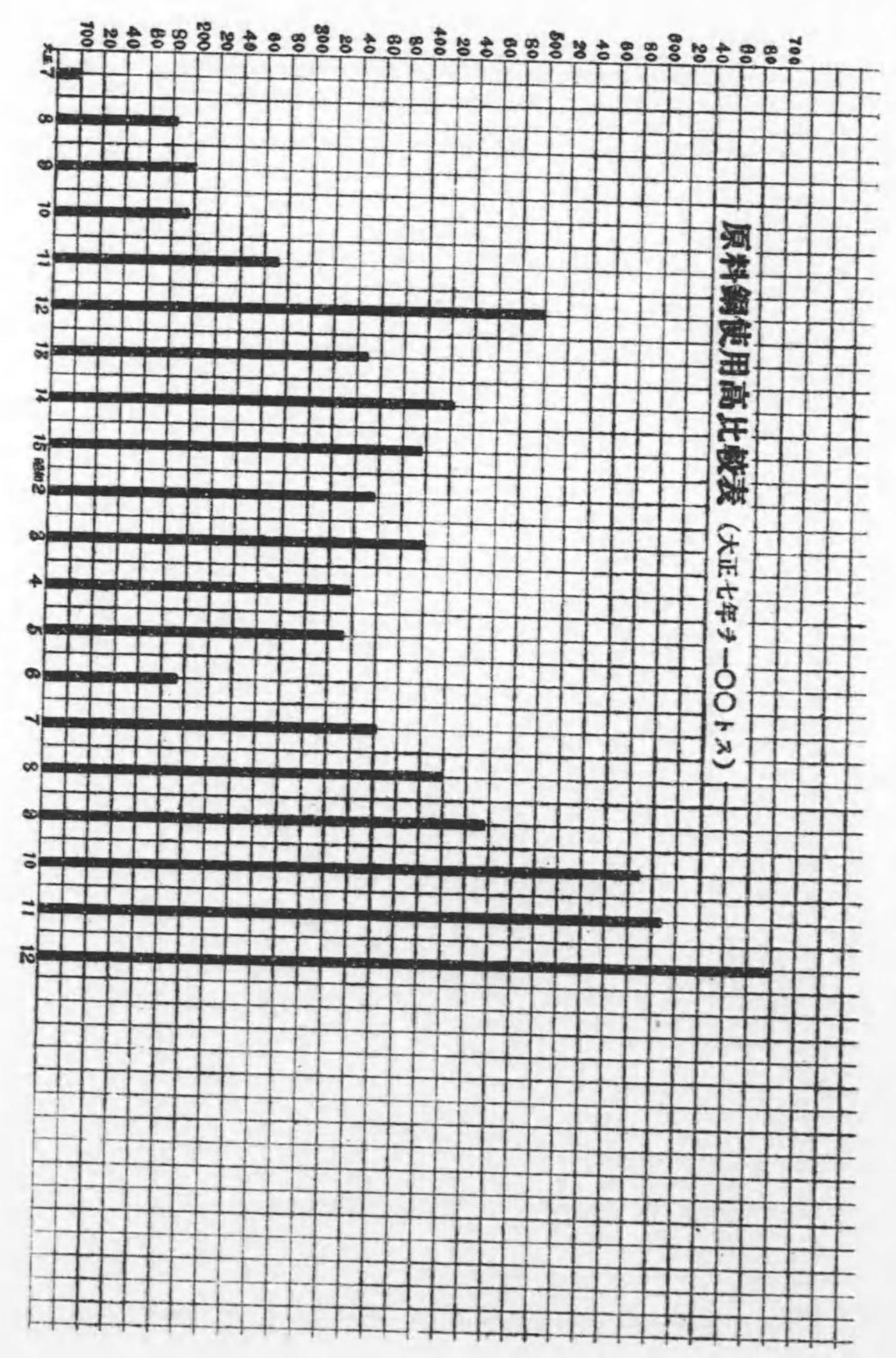
売上高比較表(大正七年上期から一〇〇パーセント)



賣上高比較表 (大正七年上期一〇〇トス)

期	別	指	數	期	別	指	數
大正七年	同上		四〇四〇	昭和四年	同上		二二二八
同上	同上		四一八八	同上	同上		二二六八
同上	同上		三五六六	同上	同上		二八一二
同上	同上		三五八五	同上	同上		〇八九六
同上	同上		五二八五	同上	同上		一一九七
同上	同上		九九六九	同上	同上		二二九七
同上	同上		三一九九	同上	同上		三二七五
同上	同上		三二七九	同上	同上		二二四八
同上	同上		二〇五五	同上	同上		四三三七
同上	同上		四七一二	同上	同上		四四一三
同上	同上		二四一四	同上	同上		四二一三
同上	同上		二一四一	同上	同上		四二一一
昭和二年	同上		二一四五	同上	同上		九九一一
昭和三年	同上		四四二九	同上	同上		三三八一

原料鋼使用高比較表 (大正七年一〇〇トス)



原料銅使用高比較表 (大正七年ヲ一〇〇トス)

年 別	指 數	年 別	指 數
大正七年	一〇〇	昭和三年	四〇〇
大正八年	一八二	昭和四年	三三八
大正九年	二〇〇	昭和五年	二三二
大正十年	一九六	昭和六年	一九六
大正十一年	二七二	昭和七年	三六二
大正十二年	五〇〇	昭和八年	四二〇
大正十三年	三四六	昭和九年	四五六
大正十四年	四二二	昭和十年	五八八
大正十五年	三九六	昭和十一年	六〇四
大正十六年	三五八	昭和十二年	七〇〇(推定)

昭和十二年六月一日印刷
昭和十二年六月四日發行

日本電線卅年略史

非賣品

編輯者 日本電線株式會社 市原俊雄
 發行所 東京市向島區寺島町二丁目八番地 日本電線株式會社
 印刷者 東京市京橋區銀座三丁目四番地 佐藤保太郎
 印刷所 東京市京橋區銀座三丁目四番地 株式會社文祥堂

373
306

終